

人権教育「エイズ患者/H I V感染者」に関する研究

香美市立繁藤中学校 教 諭 青木弘枝
高知県教育センター 指導主事 松岡聖士

昭和 58 年に H I V が発見され、その後エイズの医学的解明は進み、現在では感染力が弱く、感染経路の限られた予防が可能な感染症であることが明らかとなった。また、治療技術の進歩により、エイズの発症を抑えることが可能となり、長期慢性疾患とのとらえが可能となった。しかしながら、H I V 感染者に対する偏見や差別が厳存し、共に生きていく社会が実現されているとは言えない。

本研究では、偏見や差別の解消のために行動しようとする生徒の育成をめざし、H I V と共に生きるという視点から学習プログラムを作成し、H I V 感染者にかかわる人権課題を、自分のこととして考え、自己の課題に気付くことで行動化への意識が高まることを確認した。

キーワード：人権教育、エイズ、H I V 感染者、共生

1 はじめに

昭和 56 年にアメリカでエイズの症例が確認されて以来、世界各国でエイズ患者／H I V 感染者に対する偏見や差別が社会問題となっている。

我が国では、得体の知れない病気への恐怖から逃れようとする体質と、性へのタブー視、同性愛者や外国人への偏見といった既存概念などが相乗効果を生み、二重の差別構造を作り出して、エイズ患者や H I V 感染者を社会から疎外した。

医学的知識の普及、民間ボランティアによる啓発活動、H I V 薬害訴訟などにより H I V 感染者の人権保障が注目されるようになったが、警察官の不採用問題や保育園の入園拒否といった人権侵害事例が見られ、偏見や差別は厳存している。

平成 10 年に策定された「人権教育のための国連 10 年」高知県行動計画には、「わが国においては、昭和 61 年から昭和 62 年にかけて全国的にエイズ問題がクローズアップされ、当時は、治療方法や感染経路などが特定し難い病気であるという情報などによって、国民のエイズに対する認識が誤ったイメージとして定着しました。その後、エイズに関する様々な情報の提供により、社会のエイズに対する理解は一定進んできましたが、いまなお誤った認識や偏見が存在しており、なお一層の啓発が必要となっています。」と記載され⁽¹⁾、偏見や差別を解消するための取組の必要性が示されている。

しかし、平成 14 年に高知県教育委員会が実施した「人権に関する児童生徒意識調査」を見ると、「H I V 感染者やハンセン病回復者の人権について中学校で学習した」という生徒は 29.2%であり、県内全般での取組の弱さが感じられる。私自身、H I V 感染者の人権にかかわる授業実践がなく、効果的な学習方法の具体案を考えたいと思った。

三重県総合教育センターの「エイズ学習における『共感能力・科学的思考』を育てる教材の開発に関する基礎的研究」(1998)は、三重県内の高校生、中学生に対する調査から、「知識があっても差別的な行動をとる場合のあることが検証された」ことを報告している⁽²⁾。そこで、これまでの教育活動は、H I V の科学的解明を中心とした知識偏重の学習ではなかったか、感染者を取り巻く現状や課題の認識が十分であったのか、「H I V 感染者への偏見は過ちであり、差別することは問題である」という言葉だけが先行し、偏見や差別を潜在化させることとなっていたのではないかという疑問が出てきた。

また、木村氏(1996)は、「大学における性・エイズ講義の内容及び方法の改善に関する研究－性・エイズ講義受講者の有無とエイズ知識・態度・行動予測との関連－」において、大学生に対する調査

から、「エイズ講義を受講したことが、科学的認識の形成、共感的・共生的態度や望ましい予測行動に必ずしも結びつく結果となっていない」ことを明らかにし、その中で、「H I V / A I D S の人たちがどのような気持ちでいるのか、その人達の生きている姿や生き方から学ぶ教材、態度・行動形成につながる授業方法の改善、さらにH I V / A I D S の人々に対するボランティア支援活動への参加を通して、理解を深めることも大切ではないかと考える。」と述べている⁽³⁾。

一方、山梨氏（1994）は、「エイズの授業づくり(1)－偏見や差別を克服するための教材・授業展開のあり方－」で、『『エイズと共存していく社会、自分が感染者になっても安心して暮らせる社会を創り出すための当事者としての力』をどうつけるか』という課題を提起している⁽⁴⁾。

これらを受け、本研究においては、中学校の人権教育において、正しい見識を持ち、エイズ患者／H I V感染者と共に生きる社会の実現をめざし、主体的に行動できる生徒を育成することのできる学習の在り方を考察した。

2 研究目的

エイズ患者／H I V感染者に関する人権課題を自分のこととして考え、偏見や差別の解消のために行動しようとする生徒を育成するためには、以下の3点が有効であろうと考える。

- ・遠い世界や他人事ではなく、今の自分にかかわることであるという視点。（自分も感染する可能性がある、今、ここに感染者がいる可能性がある、という視点から、自分を、そして相手を大切にしていこうとはどういうことなのかを考える）
- ・エイズ患者／H I V感染者と共に生きている社会の現実を知り、患者／感染者の願いや思いを想像し、命の尊さ、生きることの素晴らしさに共感できる教材や学習内容。
- ・自分の中の偏見や差別性を問い直し、自己の課題に気付かせる授業展開。

そこで、以下のような研究仮説を設定し、学習プログラムの有効性を検証した。

研究仮説

共に生きるというスタンスから作成した学習プログラムにおいて、自分のこととして考えることのできる授業展開や、自分らしく生きていくということの素晴らしさを感じることができ教材及び学習内容を工夫することによって、偏見や差別をなくすために行動しようとする生徒を育成することができるであろう。

そして、めざす生徒像、及び行動化した姿を以下のように設定した。

【めざす生徒像】

- ・自分に自信を持ち、積極的に社会とつながろうとする生徒
- ・広い視野と正しい見識を持ち、互いの人権が尊重された社会をつくらうとする生徒

【行動化した姿】

- ・自分の価値を認め、自己表現できる
- ・自他の人権を尊重した正しい判断ができる
- ・人権侵害事例に関心を持ち、偏見や差別をなくそうとする働きかけができる
- ・相手の気持ちを考え、大切にすることができる

3 研究内容

(1) 学習プログラム案の作成

森氏（2002）が紹介している参加体験型学習において効果的な学習展開であるA D I D A S [activity→discussion→input→deepening→analysis→synthesis]を参考に「出会う（PWA／H※の手記やメッセージに出会う）」「知る（偏見や差別の現状を知る）」「深める（自分や社会の在り方について分析を深める）」「気付く（自己の課題に気付く）」「発信する（社会に働きかける）」という流れで、学習プログラムを構成した。また、学習したことを家庭に広げるために、学習の区切ごとに話題を提示し、家庭で語らう時間を設定することにした。 ※(PWA/H=People Living With AIDS/HIV)

(2) 在籍校において検証授業を実施

① 対象生徒

香美市立繁藤中学校 全校生徒 11 名 (1 年生 3 名 2 年生 6 名 3 年生 2 名)

② 形態

合同授業

③ 実施内容

ア 単元名 「エイズって何だろう」(2 時間)

(ア) 学習の目標

- ・H I V と共に生きている人の思いに出会い、生きる喜びに気付く。
- ・エイズ／H I V についての知識を習得する。

(イ) 観点別評価規準

- ・病気と共生する人間という視点を持つとうとしている。〔関心・意欲・態度〕
- ・エイズ／H I V について正しく理解することができる。〔知識・理解〕

(ウ) 授業展開の概略

対話と想像の大切さに気付くことをねらいとしたワークショップを行う。続いて、PWH 北山翔子さんのメッセージを受けて、自分らしい生き方を考える。そして、エイズ／H I V 感染症の基礎知識について学習する。

(エ) 振り返りシートや発表内容、観察をもとにした考察

忘れものを当てるというワークショップを行い、忘れものに着目させることによって、「健康な時には気付かないことを北山さんに気付かせてもらった」という思考の流れをつくることができた。「今まで、いろんな人に助けられたのに、自己中心的な考え方をしている自分がいやだなと思いました。人を傷付けたくない、そんな生き方をしたい」という意見が出て、北山さんのメッセージから、家族や友人、周りの人たちと共に生きている自分という視点を持たせ、人とのかわりについて振り返らせることができた。

また、自分が彼女の立場だったらと想像し、H I V と共に生きる彼女の強さに尊敬の意を表す生徒が多く、彼女の姿から、病気と共生する人間という視点を持つことができ、エイズ／H I V に対する恐怖や不安が和らいだという生徒も多かった。

エイズ／H I V 感染症については、プレゼンテーションを行ったところ、うなずいたり、つぶやいたりといった反応があり、理解の深まりが見取れた。振り返りシートには、エイズの“恐ろしさ”が印象として残っているという記述が見られた。

イ 単元名 「差別はこうしてつくられた」(2 時間)

(ア) 学習の目標

- ・命の尊さ、人の思いを感じ、偏見や差別の愚かさを知ることができる。

(イ) 観点別評価規準

- ・エイズへの偏見や差別がどのようにしてつくられ、助長されていったのか理解することができる。〔知識・理解〕
- ・将来に夢を持ち、自分らしい生き方を考えることができる。〔思考・判断〕

(ウ) 授業内容概略

エイズ／H I V に対する偏見が、どのようにして生じてきたのかを考えさせることをねらい作成したモデルストーリーをもとに、物事の一部が強調されることで、偏見が生じる場合があるという問題点を話し合う。続いて、エイズパニックについて知り、その問題点を話し合った後、エイズパニックの渦中、孤独な闘いを強いられ、血友病と共に生き、血液製剤により感染して、19 歳で亡くなった、岩崎孝祥さんの母、和美さんの手記を読み、感想を伝え合う。

(エ) 振り返りシートや発表内容、観察をもとにした考察

グループで話し合うことで、偏見や差別が生じる背景や、エイズパニックの問題点を深く考えることができ、正しい情報を取り入れて、自分の考えを持つことの大切さを確認させることができた。

また、話し合いの中では、知識だけではなく、北山さんの話を伝えることによって偏見や差別を解消しようという意見も出され、感染者に対する理解が進んだと思える場面も見られた。岩崎和美さんの手記からは、絵を描くことに情熱を傾け続けた孝祥さんの力強い人生に触れ、感動を覚えた生徒が多かった。「私たちは、健康に生まれたことを感謝して生きていくべきだと思った」と述べた生徒もあり、その気持ちを共有させることができたと思う。

人生の中で最も死と遠い世代であり、重い疾患を経験したことがない生徒たちにも、死に直面している彼の心境に寄り添い、生きるということの素晴らしさを感じさせることができたのではないかと思う。

美大進学をめざした岩崎さんの伝記は、自分の進路を模索し、日々学業に励んでいる生徒たちに大きな目標を示し、勇気を持たせたのでないだろうかと考えられる記述や発表内容もあったが、将来の夢を具体的に描き、自分らしい生き方を考えさせることは十分にはできなかった。和美さんの心境に心を留めた生徒が何人かいた。言葉には表れなかったが、振り返りシートでは全員が家族のことを考えることができたと答えており、自分の家族の絆と重ねることができていたのではないかと思う。

しかし、自分の母が、自分へ寄せる思いにまで考えを至らせることができなかった。「もし、あなたが感染したら、あなたの母は、どうするだろう」という視点から、支援することで、より自分のこととして考えさせることができたのではないかと思う。また、「血友病やどんな病気をもっている人も、同じ人間なんだから、差別はしたらいけないと思った」という感想もあり、彼の生き方を知ることで、偏見や差別の誤りを理解させることができた。

ウ 単元名 「幸せな社会とは」(2時間)

(ア) 学習の目標

- ・共生社会の実現のために必要なものを考える。

(イ) 観点別評価規準

- ・人権侵害事例の過ちに気づき、望ましい社会の在り方について考えることができる。

〔思考・判断〕

- ・自己の意識を分析し、自分の課題を見付けることができる。〔思考・判断〕

(ウ) 授業内容概略

「あなたはどちらを選ぶのか」という質問をし、その理由を考える。質問は、「H I V感染者を雇用する病院と、医療拒否をする病院とではどっち?」「確かな技術のある感染者のコックが働いているレストランと、その感染者を解雇するレストランとではどっち?」「感染者の選手がいるバスケットボールチームと感染者の入部を拒否するバスケットボールチームとではどっち?」の3ケースで行う。

続いて、PWH武田淳さんの手記を読み、感染者の人権を侵害する医療拒否や解雇、社会的孤立という事例に対し、武田さんがどのように感じ思っているのかを考える。そして、パネラーを提示し、友だちが、もし感染していたら、自分はどう思い、どのような行動をとるかを、また、自分が感染した場合、どのような思いを持っている人に打ち明けるのかを考えることから、自己の課題を見付ける。

(エ) 振り返りシートや発表内容、観察をもとにした考察

「あなたはどっちを選ぶのか」では、偏見や差別を許さない、互いの人権が保障されている社会でこそ、みんなが幸せになれるという意見が出され、人権侵害事例の過ちに気づき、

望ましい社会の在り方について考えさせることができた。しかし、感染者が働いている病院やレストランは、感染しそうで怖くて行けないという意見もあり、エイズ／H I Vについての医学的知識をもう一度説明し直した。

武田さんの手記からは、社会的孤立という差別の現状を、感染者の気持ちに寄り添う形で理解し、信頼し悩みを打ち明けることができる友人を持つことの素晴らしさに気付かせることができた。「武田さんの孤独な思いと、友人の優しさを知り、人間が差別を作るので、同じ人間、なくすことができると思った」という意見が述べられ、人の意識が共生社会を創造していくことを確認できた。また、「もし、私がH I V感染者であれば、それを打ち明けることのできる友だちを持ち、大切にしていきたい。また、友だちがH I V感染者であれば、それを受け入れる人間になりたい。そして、大切にしていきたい」という意見があり、自分が感染者だったら、自分が打ち明けられたら、という視点から考えさせることができたと思う。しかし、より具体的に、友人から感染したと打ち明けられた時の自分の姿と、自分が感染した時に望む友人の姿を比べることから、自己の課題を見付けようという活動は、十分な時間が確保できなかったため、意見交換を行い深めることができず、友人とのかかわりの中で、目標とする自分の生き方を追求させるまでに至らなかった。

エ 单元名 「あなたならどうする？」(2時間)

(ア) 学習の目標

- ・行動に移すことによって、偏見や差別をなくしていくことができることに気付く。

(イ) 観点別評価規準

- ・積極的にロールプレイに取り組んでいる。〔関心・意欲・態度〕
- ・人々の意識に働きかける具体的な内容を考え、発表することができる。〔表現・技能〕

(ウ) 授業内容概略

オリジナルシナリオ「あなたならどうする？」でロールプレイを行う。あらすじは、エイズについて学んだ中学生が、休日の生活の中で、自分の差別性に気付き課題を見付けていくという場面から始まり、友人の家庭で、婚約者が感染者だったら、結婚を親に反対されたら、自分たちはどうするだろうかとあれこれ話し合った生徒たちが、感染者に直接会ってみたくなりP T A会長に相談しようという場面へと続く。最後は、感染者を招いて講演会をしようと計画していたP T A会長が、地域に反対の声があって講演会を実行できないという報告をするという展開である。

ロールプレイ後、気付いたことや感じたことを話し合い、そして、講演会を成功させるために自分たちにできることを話し合う。

(エ) 振り返りシートや発表内容、観察をもとにした考察

意欲的にロールプレイに取り組み、エイズ患者／H I V感染者に関する人権課題がより明確になったという生徒もいた。ロールプレイ後の話し合いも、非常に積極的で、これまでの学習で得た知識のうえにロールプレイを重ね、話し合うことにより、論点が分かりやすくなったものと思われる。

一方、自分自身の偏見や差別性、知らないことから起こる偏見や差別、学んでも残る偏見や差別、正しいことを訴えることにより自分が偏見や差別を受けてしまうかもしれないという恐れなど、生徒それぞれに課題が見出された。

エイズ患者／H I V感染者に対する偏見や差別が温存されている原因を、明確にとらえることができ、多くの人に呼びかけ、理解を深めていくことが大切であるということを確認させることができた。また、グループ発表時には、活発な質疑応答が展開され、互いの思いをより深く知ることができ、人々の意識に働きかける具体的な啓発活動の内容を考え、発表させることができた。

オ 単元名 「共に生きる」(2時間)

(ア) 学習の目標

- ・発信の重要性に気付き、地域の方々とH I V感染者とに対して自分の思いを伝える。

(イ) 観点別評価規準

- ・相手の気持ちを考えて、スローガンやメッセージを表現することができる。[表現・技能]
- ・旗、キルトを意欲的に作成することができる。[関心・意欲・態度]

(ウ) 授業内容概略

「繁藤地域をよりよくしよう」という趣旨で、地域に向けてのスローガンを考え、小旗を作成する。続いて、エイズキルトと呼ばれるメモリアルキルト、ホワイキルト、ベビーキルト、メッセージキルトを通して、エイズ患者やH I V感染者をサポートする人たちの活動について知り、感想を述べ合う。最後にメッセージキルトの作成を提案する。

(エ) 振り返りシートや発表内容、観察をもとにした考察

知らないことによって偏見や差別がおこる場合があるから、知らせることはとても大切であると理解し、エイズ患者やH I V感染者の気持ちにも十分配慮して、スローガンを考え、熱心に旗を作成させることができた。

また、エイズキルトから、人と人とのつながりの温かさを感じ取る発言が見られ、生徒からメッセージキルトを作りたいという意見が出て、全員で作成することを提案し、行動につなげることができた。

④ 学習プログラムの有効性を検証

ア 授業の振り返りから

(ア) 自己評価の変化

図1を見ると、「関心を持って学習することができましたか」の問いかけに対して、「よくできた」、「できた」と回答しており、「あまりできなかった」、「全くできなかった」と回答した生徒はいなかった。

図2を見ると、「先生や友だちの意見、考えを聞けましたか」の問いかけに対しても、「あまりできなかった」、「全くできなかった」と回答した生徒はおらず、第5単元で「よくできた」と回答した生徒が最も多い。

図3を見ると、「自分の思いや考えを伝えることができましたか」の問いかけに対して、第1単元では、「全くできなかった」、「あまりできなかった」と回答した生徒が、第2単元、第3単元では減少し、第4単元、第5単元では、全員が、「よくできた」、「できた」と回答している。

(イ) 考察

提示した学習内容が、関心を引くものであったことが分かる。検証授業においても、活発に発言する生徒の様子が見られ、生徒の意見を中心に学習を進めることができた。また、話し合い活動を重ねていくことで、自己表現力が高まっていることも読み取れた。一方、友だちの発表を聞き、自分の意見をまとめようとする様子や、意見交換し、グループの発表としてまとめていく姿が見られた。

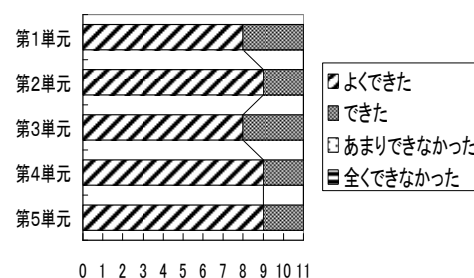


図1 「関心を持って学習することができましたか。」

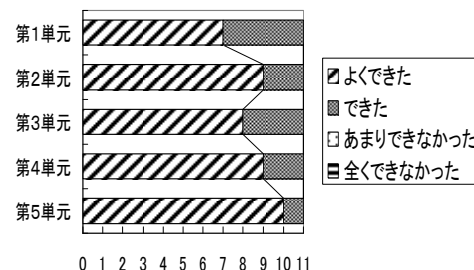


図2 「先生や友だちの意見、考えを聞けましたか。」

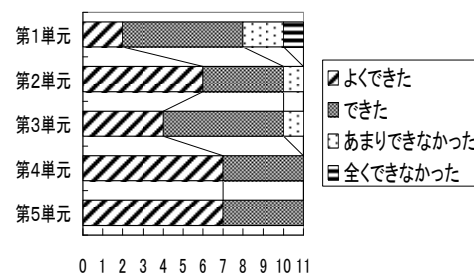


図3 「自分の思いや考えを伝えることができましたか。」

イ 記述や発表内容から

「関心を持って学習できましたか」、「先生や友だちの意見、考えを聞けましたか」、「自分の思いや考えを伝えることができましたか」の3項目における自己評価が、特徴的な変化を見せたA、B、C3名の生徒に注目し、その学習の流れを振り返りシートの記述内容と、授業での発表内容やワークシートへの記述内容をもとに考察した。

なお、振り返りシートの記述内容は、メタ認知、認知、情緒、行動、感想、その他の6つのカテゴリーに分類した。分類にあたっては、「現代学校教育大事典」の記述に基づき、メタ認知を「自分の頭の中で現在進行中の認知活動（知覚する、記憶する、理解する、問題を解くなど）を再び認知の対象として（対象化あるいは客体化）、それらの活動を評価し、制御すること」、認知を、「知覚、記憶、学習、言語理解、推論、問題解決など、人間の知的な作用」、情緒を「短期間の比較的強い感情の動き」、行動を「外部に現れた観察することのできる活動」とした⁽⁵⁾。また、所感や所見を感想とし、これまでの5つに分類できないものをその他とした。

(ア) 生徒A

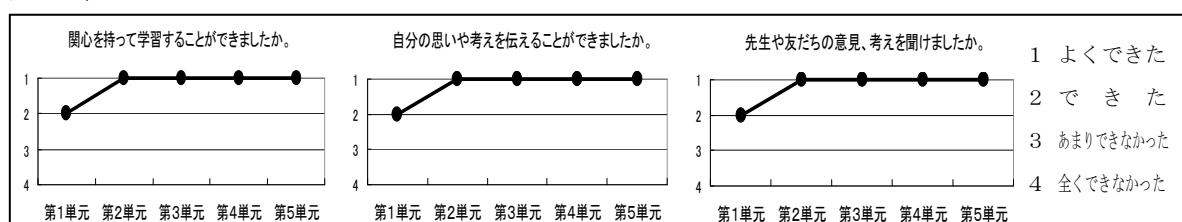


図4 生徒Aの自己評価の変化

資料1 生徒Aの学習の流れ

振り返りシート		発表やワークシート
第1単元		第1単元
認知	「忘れもの当てゲーム」をして、人の思っている事を想像したりして、忘れものでは、人それぞれちがって、みんなの考えがよく分かりました。	独りじゃ生きていけないということを、とても考えさせられた。みんなで助け合って、感謝しながら生きていく。
認知	「ポジティブなわたしからあなたへ」の文により、とても考えさせられました。独りじゃ生きていけない、助け合い、感謝して生きていかなければいけないという事が分かりました。	第2単元
認知	エイズは、とても身近な事だと分かりました。	エイズにかかって、もう治らないとか、もう死んでしまうしか思うんじゃないかと、残された人生を精一杯生きていかなければならないとあらためて思いました。 エイズにかかったこの人は最後まで、がんばって生きてとても感動しました。もし、僕がエイズにかかっていたら、この人のように最後まで立派に生きれないと思いました。
第2単元		第3単元
認知	エイズに感染しても、残りの人生を精一杯生きていかなければいけないという事が分かった。	HIVにかかったとしても、それをのりきって生きていかなければいけないなと思った。
行動	こんな立派な生き方をばくもしていくように努力したいです。	第4単元
第3単元		HIV感染者や私たちは、偏見や差別をなくすように呼びかけなくてはならない立場だけど、HIVについて正しい知識を知っていない人たちの反対の声によって、呼びかけにくくなってしまっている。呼びかけたとしても、その後、偏見や差別をうけるかもしれません。 HIV感染者を偏見や差別をする人たちは、HIVについて悪いイメージしか頭にない人が多いから、講演会に行なければならぬと思った。 自分が思っていた以上に、今回勉強して、自分が偏見や差別の心があることが分かって、直していかなければいけないと思った。HIV感染者（への偏見や差別：補足）がこの世の中からなくなるように講演会や国の問題にして早くなくなしてほしい。
行動	HIVになった人も人にばれるかもしれないという、いろいろな心配をのりこえてがんばっているのを見て、こういう生き方をみないたいなと思いました。	
行動	HIV感染者と何かでいっしょに仕事をするとかそういう場合になれば、特別あつかいせずに接していきたいです。	
情緒	自分がもしHIVになると、いろいろな人たちにHIVについて分かってもらいたいです。	
行動	少しでも、特別あつかいや差別している人が、減るようにしたいです。	
第4単元		
認知	偏見や差別をなくしていかなければいけないと思った。	
行動	勇気をもって、呼びかけたい。	
第5単元		
行動	HIV感染者を、メッセージキルトという形で、はげましている人たちを見て、ばくも、冬休み中にメッセージキルトをつくってわたしたいです。	

図4を見ると、生徒Aは、3項目において、第1単元では「できた」、第2単元、第3単元、第4単元、第5単元では、「よくできた」と回答しており、自己評価が向上している。

資料1を見ると、生徒Aは、第1単元で北山さんの手記「ポジティブなわたしからあなたへ」を読み、助け合い、感謝しながら生きていくことの大切さを知り、エイズを身近なことだと認知している。

第2単元では、岩崎さんの生き方を知り、自分がエイズにかかったとしたら彼のように立派に生きられないと思うが、彼のような立派な生き方をしていくことができるように努力したいという行動化への意思を表明している。

第3単元では、いろいろな心配を乗り越えて生きている武田さんの生き方を見習い、自分の在りたい姿を明確にしている。そして、武田さんの気持ちを理解し、偏見や差別をなくすために行動しようとしている。

第4単元では、偏見や差別をなくしていくように呼びかけると、自分が偏見や差別を受けてしまうかもしれないという恐れや、自分自身の中にも偏見や差別の意識があるということに気付いている。しかし、その過ちを認め、勇気をもって呼びかけたいという強い行動化の意思が見られる。

第5単元では、感染者をはげましている人たちを知り、積極的にキルト作りの意志を示している。

(イ) 生徒B

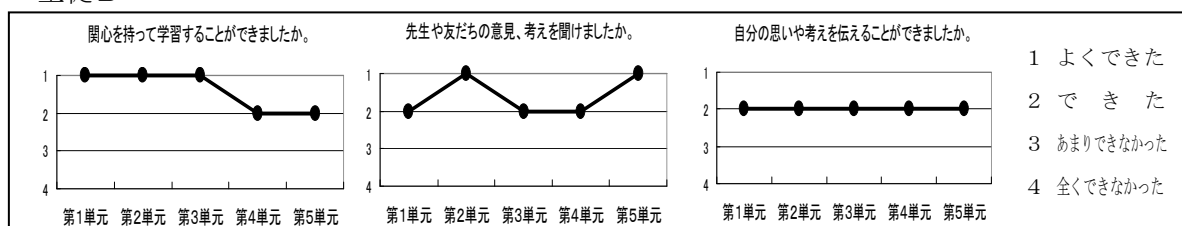


図5 生徒Bの自己評価の変化

資料2 生徒Bの学習の流れ

振り返りシート

第1単元

認 知	エイズは感染経路は3つと少ないし、ウイルスも弱いし、感染者の話とかを聞けば、そんなに悲観するような病気ではないということが分かった。
情 緒	それなのに差別があるのは、とても嘆かわしい。

第2単元

認 知	僕の一番関心のあるエイズの差別は、度重なるデマと誤報によって肥大した、人間の汚点のかたまりだと思う。
認 知	エイズパニックが起こる前に、原因が分かっていたはずなのに何故パニックが起こったのか、そんな情報の遅れも原因と思える。
認 知	もっとも、自分がかかっているのに、「エイズにかかっている」と疑がわれるだけで迫害を受けるというのはとても悲しいことである。

第3単元

認 知	自分の落とした食べ物を自分で拾えないというのはとても幼稚なことである。
認 知	エイズのデマを作ったマスコミは、ちゃんと責任という責任をとってほしいと僕は思うが、今さら正しいことを報じたって差別が収まるような、エイズ患者が告白できるような社会にならないと思う。
行 動	だから、今、正すのであると思う。この社会を僕らの手で。

発表やワークシート

第1単元

僕が、HIVにかかったら、多分、自分がHIVにかかったとすら言わないだろう。僕は、そんなに勇気がないので、北山さんのような人になりたいと思った。

今は無責任に今を生きているから、いつか恩返しできるようにがんばっていきたい。

第2単元

僕が、この亡くなった孝祥さんであつたら、孝祥さんよりも長くは生きられないだろう。

薬害エイズという不条理な病気を押し付けられ、この間まで描いていた夢をうばわれたことに、ただただ怒りに満ちたまま死んでいくと思う。孝祥さんは、そんな中にも夢をあきらめず、追い続けながら亡くなっていったので、そんな精神を持ち続けたい。

第3単元

エイズというのは、病気の恐怖よりも、自分が告白できずに、深い孤独に追いやられるさびしさだということが分かった。僕もこの女性のような、深い孤独から手をさしのべられるような人になりたい。

第4単元		第4単元
認 知	今日のテーマである「あなたならどうする」という言葉だが、事なかれ型である僕には、とても重いテーマだった。	病気というものは、最初に見つかったときには「奇病」として扱われ、分かってくにつれ、「奇病」と呼ばれることはなくなるのだが、エイズパニックのときは、わかっているにもかかわらず、起こってしまったことである。 将来、また、新しい「奇病」が出てくると思うが、その時自分は、偏見や差別を抑えられるのだろうか。エイズを学んで分かったことは、そういう局面に陥ったときにどうするか、ということである。
行 動	けれど、重いからこそ、重要であり、もっと学ばなければならないと思う。	
第5単元		
メタ認知	今日はエイズについてのキルトのことを学んだ。最後に「エイズについてのことが、だんだん分かってきているんだなあ。」というような感想を書けて良かった。	

図5を見ると、生徒Bは、「関心を持って学習することができましたか」の問いに、第1単元、第2単元、第3単元においては「よくできた」と回答しているが、第4単元、第5単元では「できた」と回答しており、自己評価が低下している。学習が進むにつれて関心が低下したのは対象生徒のうち生徒Bだけであった。

資料2を見ると、生徒Bは、第1単元で、北山さんのような勇気が自分にはないことを認め、北山さんのような人になりたいと自分の生き方を振り返ることができている。また、今の無責任な生き方を反省し、今後の生きる課題を明確にしている。

第2単元では、偏見や差別のメカニズムを考察し、その愚かさを嘆くとともに、不条理な病気を押し付けられながらも、夢を追い続けた岩崎さんの精神を自分の精神と重ね考えることができている。

第3単元では、孤独と闘う武田さんの気持ちを理解し、手をさしのべられる人になりたいと自己の在りたい姿をとらえることができている。そして、感染者の置かれた社会的孤独などのエイズパニックによって肥大した偏見や差別の現状を知り、自分たちの力で社会を正そうという意思表示をしている。

第4単元では、将来出てくるであろう奇病に対峙した時に、偏見や差別を抑えることができるであろうかという自分自身への疑問を開示している。そして、偏見や差別に対して、あなたならどうするかと問われて、自分には重いテーマだと認め、だからこそ重要で、学ばなければならないと行動化への意思を表明している。

(ウ) 生徒C

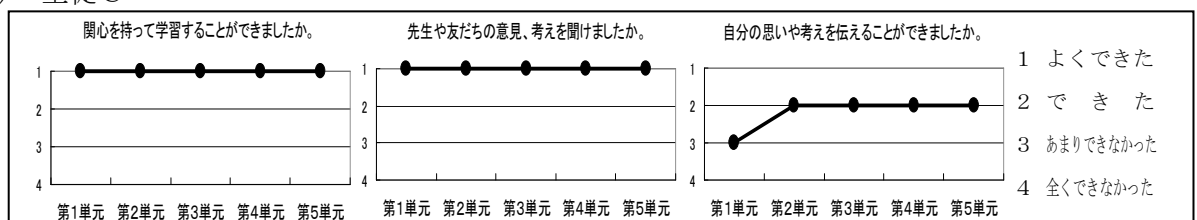


図6 生徒Cの自己評価の変化

資料3 生徒Cの学習の流れ

振り返りシート		発表やワークシート
第1単元		第1単元
感 想	自分の生き方についてや、友だちの意見・考えとか聞けたり学べたりしてよかったです。	北山さんのような生き方をしてみたいし、周りの人たちに助けられていて生きていることを忘れずに感謝しながら生きていきたい。
認 知	エイズについて知っていたことも知らなかったこととかもあったけど、どんな病気か理解できました。	
第2単元		第2単元
認 知	エイズでの差別についてよく分かりました。	家族が病気で苦しんでいるのを毎日見ているお母さんは、とてもつらかったんだなと思いました。 孝祥さんは生まれながらの病気と闘いながら自分の夢も追い、最後まであきらめなかったことは、すごいことだと思いました。
感 想	班とかでも話し合いがよくできてよかったと思います。	

第3単元		第3単元
その他	「幸せな社会とは」についてみんなと考えていけたと思います。	私は、「よく言ってくれたわね。ありがとう。」という女性の言葉がとても印象に残りました。この女性のようなエイズの理解者が増えていけばエイズで苦しんでいる人たちも武田さんのように周りに打ち明けていけるんじゃないかと思いました。
感想	エイズ感染者の気持ちなども分かってよかったと思います。	
第4単元		第4単元
認知	今日は、エイズの演劇とか、講演会を開くためにどんなことをしたらいいとか、みんなで話し合えたりできたのでみんなの考えていることとか思っていることが分かってよかった。	
第5単元		第4単元
情緒	実際にエイズ（HIV感染者に関する人権課題に対する関心：補足）を呼びかける旗とかが作れてとても楽しかったし、よかったと思います。	誰にでもエイズに少しぐらいは偏見を持っていると思う。だから私も周りの人がエイズになってもそれまでのようにはできないんじゃないかと思う。
情緒	メッセージキルトも自分たちで作るので、どんなのができるかたの楽しみです。	

図6を見ると、生徒Cは、「関心を持って学習することができましたか」の問いに、全単元において「よくできた」と回答している。また、「先生や友だちの意見、考えを聞けましたか」の問いにも、全単元において「よくできた」と回答している。「自分の思いや考えを伝えることができましたか」という問いでは、第1単元で、「あまりできなかった」と回答し、第2単元、第3単元、第4単元、第5単元で「できた」と回答している。「関心を持って学習することができましたか」の問いと「先生や友だちの意見、考えを聞けましたか」という問いへの自己評価は高いが、それに比して「自分の思いや考えを伝えることができましたか」の問いに対する自己評価が低い。

資料3を見ると、生徒Cは、第1単元で、北山さんの生き方を知り、周りの人に助けられて生きていることを忘れずに、感謝しながら生きていきたいと自分の生き方を考えることができている。また、友だちの意見や考えを聞いたことを評価している。

第2単元では、岩崎さんの母の気持ちを思いやることができ、岩崎さんの生き方に感動している。

第3単元では武田さんの気持ちを知り、エイズの理解者が増えれば、エイズに苦しんでいる人たちも打ち明けていけるのではないかと考察している。

第4単元では、話し合いにより、みんなの考えていることや思っていることが分かったことを評価している。しかし、HIV感染者の人権課題に対して行動化への意思を示すことは全くなかった。また、第4単元で使用したワークシートには、「だれにでもエイズに少しぐらいは偏見を持っていると思う。だから私も周りの人がエイズになってもそれまでのようにはできないんじゃないかと思う」という記述が見られたが、その思いを伝えることはなかった。

(ウ) 考察

生徒Aは、感染者の生き方に出合い、その強さを知り、自分の生き方を考えることができている。そして、社会の諸相を知り、自分の過ち（偏見や差別性）に気づき、解決していくことを課題としてとらえ、行動していくことの大切さを考えることができている。第1単元における生徒Aの学習の様子は、あまり意欲的ではなかった。しかし、第2単元において、積極的に発表する様子が見られた。グループの代表となり、意見を発表し、評価を得たことで、自信を持って学習できるようになり、より身近なこと、自分のこととして考えることができていったように思われる。

生徒Bは、感染者の勇気と精神に出合い、自分の生き方を考えることができている。エイズパニックや感染者の人権侵害事例について知り、新たな奇病に対する偏見や差別、パニックが生じた時の自分の姿について考えを深めることができている。そして、事なかれ型の自分を乗り越えるために学んでいかなければならないということに気付いている。第4単元、第5単元で関心は低下しているが、自分のこととして深く考えることができている。

また、「自分の思いや考えを伝えることができましたか」の問いに、全て「できた」という

自己評価であり、「よくできた」までは至っていない。しかし、第1単元から、積極的に発言する様子が見られた。生徒Bは、自ら図書を読み、他の生徒よりもエイズ／H I Vについての既得知識があり、思考も深いことから、生徒Bの課題意識を十分に満足させる学習とならなかったのではないか。そのため、「先生や友だちの意見、考えを聞けましたか」の問いへの自己評価が第3単元、第4単元で低下しているのではないかと考えられる。より細やかな評価や声かけを行うことによって、生徒Bの学習意欲も高まったのではないかと考えられる。

生徒Cは、検証授業の中で、積極的に発言する様子が見られず、グループでの話し合いにおいても、自分の思いを語ることが極めて少なかった。授業者の声かけやグループの励ましも、発表意欲を高めることができなかった。

第2単元で使用したワークシートには、「ふつうにする。でもどっかで抵抗がある」とメモがあり、記述することによって気持ちを表現しているものの、本音を言葉にして人に伝え意見交換することができなかったため、H I V感染者にかかわる人権課題を自分のこととして考え、人権侵害に対して自己の課題を発見することができなかったのではないかと考えられる。

生徒A、Bの検証事例から、学習プログラムの有効性はある程度確認できる。生徒A、Bは、感染者の手記やメッセージに出合い、その生き方から、偏見や差別の過ちを知り、自分の生き方を振り返り、社会の実態を知ることができた。その過程で結果として、自己を見つめ、自分の中の偏見や差別性に気付き、解決していく方法を見付けることができている。

このことから、話し合いや意見交換といった学習活動は、H I V感染者に関する人権課題を自分のこととしてとらえ、考えていく授業展開として有効であると言える。しかし、メタ認知に分類される記述内容は少なく、メタ認知できる場面設定が弱く、自己教育力を培うことができなかったという課題が残る。

また、生徒Cは、自己表現することが少なく、H I V感染者に関する人権課題を自分と重ねて考えていると思われる記述や発表が見られなかった。

話し合い活動の中で、自分の意見を述べるのが困難な生徒の「気付き」と「発見」を支援していくことが不十分であった。自由に発言できる雰囲気をつくるか、本音を語ることでできる環境づくりや学習の進め方をいかに工夫していくか、そして、話し合いの場を適切に設定し、内容を深めるために十分な時間を確保していくことが重要であるとともに、自己表現に戸惑いのある生徒が、安心して思考を深めることのできる学習展開も必要ではなかったかと思われる。話し合いのグループを2人1組を基本にするなど、より少人数での活動が有効なのではないだろうか。

ウ 事前、事後のアンケート調査から

(ア) エイズ／H I Vに対する関心の変化

図7を見ると、検証授業前に、「関心がある」と回答した生徒は3人であったが、検証授業後に7人に増加している。検証授業前に、「あまり関心がない」と回答した生徒は4人であったが、検証授業後には3人に、検証授業前に、「関心がない」と回答した生徒は3人であったが、検証授業後は0人に減少した。

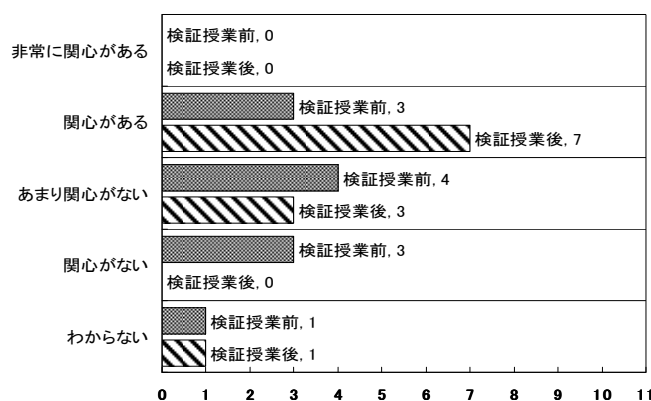


図7 「エイズ／H I Vについて関心があります

しかし、検証授業前も検証授業後も、「非常に関心がある」という生徒はいなかった。

(イ) 学習による意識の変化

表1を見ると、②の「学習を通して、HIV感染者の願いや生き方を理解することができた」及び、⑤の「学習を通して、偏見や差別、不合理に気付くことができるようになった」の問いに全員が「はい」と回答している。次に、⑥の「学習を通して、偏見や差別をなくすために自分が何をしなければならないかを、理解することができはじめた」及び、⑧の「学習を通して、自分の日常生活の中で、差別を許さず自他の人権を大切にしなければならないと思うようになった」の問いに、10人が「はい」と回答している。続いて、③の「学習を通して、他の人の立場に立って考えることができるようになった」及び⑦の「学習を通して、他人を認め協力し合いながら、良い人間関係を築いていこうと思うようになった」の問いに9人が「はい」と答えている。

しかし、④の「学習を通して、相手の思いを大切にしながら、自分の主張を適切に伝えたり表現することができるようになった」の問いに「はい」と回答した生徒は8人であった。

また、⑩の「HIV感染者を支えるボランティア活動があれば、参加したいと思う」の問いに「はい」と回答した生徒は7人で、①の「学習を通して、自分の良さや可能性を見出すことができるようになった」及び⑨の「学習を通して、より良い社会を実現するために、自分のすべきことが見つかった」の問いに「はい」と回答した生徒は6人であった。

表1 事後アンケートの集計

質問項目	回答	はい	いいえ	わからない
①学習を通して、自分の良さや可能性を見出すことができるようになった。		6	0	5
②学習を通して、HIV感染者の願いや生き方を理解することができた。		11	0	0
③学習を通して、他の人の立場に立って考えることができるようになった。		9	0	2
④学習を通して、相手の思いを大切にしながら、自分の主張を適切に伝えたり表現することができるようになった。		8	0	3
⑤学習を通して、偏見や差別、不合理に気付くことができるようになった。		11	0	0
⑥学習を通して、偏見や差別をなくすために自分が何をしなければならないかを、理解することができはじめた。		10	0	1
⑦学習を通して、他人を認め協力し合いながら、良い人間関係を築いていこうと思うようになった。		9	0	2
⑧学習を通して、自分の日常生活の中で、差別を許さず自他の人権を大切にしなければならないと思うようになった。		10	0	1
⑨学習を通して、より良い社会を実現するために、自分のすべきことが見つかった。		6	0	5
⑩HIV感染者を支えるボランティア活動があれば、参加したいと思う。		7	0	4

(ウ) エイズ／HIVに対するイメージの変化

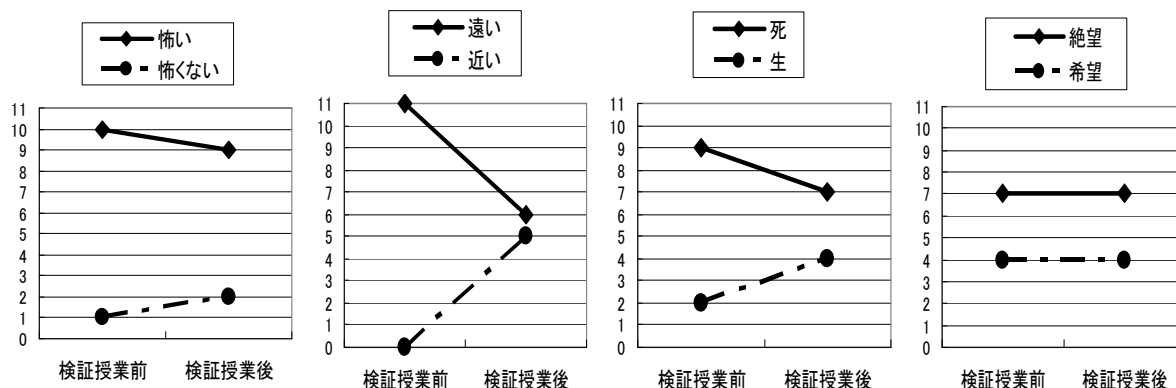


図8 「怖い」か「怖くない」か

図9 「遠い」か「近い」か

図10 「死」か「生」か

図11 「絶望」か「希望」か

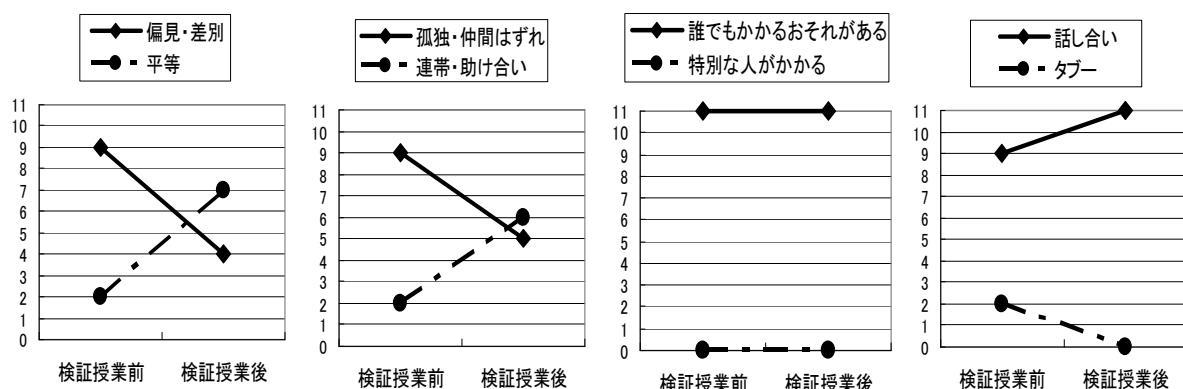


図 12 「偏見・差別」か「平等」か 図 13 「孤独・仲間はずれ」か「連帯・助け合い」か 図 14 「誰でもかかるおそれがある」か「特別な人がかかる」か 図 15 「話し合い」か「タブー」か

「絶望」か「希望」か (図 11)、「誰でもかかるおそれがある」か「特別な人がかかる」か (図 14) を問う項目では回答数に変化が見られなかったが、その他の項目で、イメージの変化があった。

「偏見・差別」か「平等」か (図 12)、「孤独・仲間はずれ」か「連帯・助け合い」か (図 13) を問う 2 項目で、検証授業前後に回答数が逆転している。

「遠い」か「近い」か (図 9) を問う項目では、検証授業前に全員が「遠い」と回答していたが、検証授業後には 5 人が「近い」と回答している。「話し合い」か「タブー」か (図 15) を問う項目では、検証授業後に全員が「話し合い」と回答している。「怖い」か「怖くない」か (図 8)、「死」か「生」か (図 10) を問う項目では、わずかに変化が見られた。

(エ) 考察

図 7 から、検証授業前のエイズ／H I V に対する関心の低さが分かる。関心がある生徒は 3 人で、関心がない (「あまり関心がない」及び「関心がない」) 生徒が 7 人いた。検証授業後に、関心のある生徒が 7 人となり、向上は見られるものの、関心の持てなかった生徒や「わからない」という生徒もいる。また、「非常に関心がある」というレベルまで達する生徒がいなかった。エイズ／H I V への関心を高めていく取組が必要である。

表 1 から、検証授業によって、エイズ患者／H I V 感染者の理解や、人権侵害についての理解を深めていることが読み取れる。最後の単元で実施した振り返りシートに、「今回勉強して、自分も間違った認識をしていたことに気付いた。感染者は、誰にも言えないというつらい環境にいるので、私は、感染者に打ち明けてもらえるような人になりたい。また、身近に間違った認識をしている人がいたら、ちゃんと正してあげたい」という記述や、「エイズに対するイメージは、あまり、いいイメージじゃなくて、最初はこわかったけど、授業をしていくうちにエイズは『怖くないんだ』とか、『みんなで助け合って生きていかなきゃ』と思いました。もし、授業を受けていなかったら、エイズに対するイメージはこわいままやったし、近くにエイズの人がいたら差別していたかもしれません」という生徒の記述があった。その他の生徒の記述や発表の内容からも、学習プログラムによって、感染者を理解し、これまでの自分を振り返り、これからは偏見を持たない、差別はしないという意識を高めることができたと思う。

しかし、表 1 からは、社会への働きかけや、ボランティア活動への参加について、消極的な態度が見られる。今回の授業では、地域に訴えるために小旗を作り、公官庁等の窓口に掲示していただいた。興味を示してくれた方が何名かいらっしゃったということを知ったが、その言葉は直接、生徒には届かず、成果を感じることができなかったのではないかとということと、プログラム展開の都合上、小旗は 1 時間で作成したことなどもあり、十分な取組ができなかったことから、自分の行動が社会を変えるという達成感を得るまでに、至らなかった

と考えられる。

検証授業では、H I Vを受け入れ、共に生きている人々の手記に出会い、振り返りシートの感想に見られたように「エイズになっている人は強く生きているんだなあと思いました」という印象が強く残ったようである。しかし、受け入れられないまま、孤独の中にいる多くの感染者がいる。自分が感染したら、こんなに強く生きられない、自分が嫌いになってしまうかもしれないという思いを生徒は伝えていた。この思いを掘り下げ、社会の偏見や差別を感じ、病気の恐怖にさいなまれながら生きている人々の気持ちを想像し、共感させる展開が必要であったのではないかと思う。また、エイズ患者やH I V感染者をサポートしている人たちの具体的な活動内容や思いを知り、ボランティア活動の目的や意義を理解できる授業内容を充実させていくことも必要ではないかと考えられる。

一方、「自分の価値を認め、自己表現できる」姿を十分に形成できなかった。話し合い活動の中で、互いに評価し合える場を意図的に設定していくことが重要ではなかったかと考えられる。

図8から図15を見ると、エイズ／H I Vに対するイメージが変化していく兆しが認められる。しかしながら、「怖い」「遠い」「死」「絶望」といったマイナスイメージは強く、プラスイメージへ転換させていくことは容易ではないということが分かった。特に、「怖い」というイメージをいかに払拭していくかが、課題であると思う。エイズ／H I V感染症は、重度の免疫不全という障害に至る疾患であり、未だに完治させる方法はなく、長い治療には、ストレスや多額の費用が伴う深刻な病気で、一概に怖くないというものではない。しかし、恐怖心が強ければ、その対象から遠ざかろうとする心理が働き、無関心になるという状況を生じることがあると思う。

生徒の記述内容から、感染者の話やボランティアの話を聞いて、恐怖心が和らぎ、安心感を抱くことができていることが分かった。また、検証授業後に全員が「話し合い」のイメージを持ち、H I V感染者に関する人権課題を話し合っていくことの重要性を受け止めることができていることから、更に学習を重ねて、繰り返し課題に取り組むことで、プラスイメージへの転換を図り、怖いというイメージを払拭していくことができるのではないかと考えられる。

4 まとめ

学習プログラムによって、H I V感染者の存在を知り、その思いに触れ、これからは偏見を持たない、差別はしないという意識を高めることができた。また、感染者の生き方に学び、自分の生き方や家族や友だち、人とのより良いかかわりについて振り返ることもできた。自分の中の偏見や差別性に気付いた生徒は、その過ちを正そうとし、これまでの無知に気付いた生徒は、周囲の理解を深めるため行動しようという意思を見せており、自己の課題に気付くことで、行動化への意識が高まることが確認された。話し合いや意見交換が、自分のこととして考えること、自己の課題に気付くことに効果があると考えられる。

一方、生徒の持つ怖いというイメージを払拭し、関心を高め、社会に働きかけようとする意欲を高めるためには、H I V感染者との共生社会をめざす学習を、中学校の3年間を通して計画的に設定し、繰り返し課題に取り組むことが有効であろうと考える。更に、PWA／Hをサポートする人々との出会いを工夫することによって、イメージの転換を図り、社会へ働きかける意欲を高めていくことができるのではないかと思う。

しかし、現実の生活の中で、エイズ患者／H I V感染者の姿が見えにくいだけでなく、サポートしている人々の姿も見えにくい。偏見や差別により、「顔」を隠さなくてはならないという現実から、患者や感染者を支える人々の姿に直接学ぶということが難しいという課題もある。また、性教育の中で、

H I V感染者とコミュニケーションをとることをねらいに予防教育を学ぶことや保健体育科において、性感染症の一つとしてエイズを学ぶことにより科学的見識が深まり、偏見や差別を乗り越えていく力を培うための土壌づくりができるのではないかと思う。

また、検証授業の中では、社会の一員であるという認識を持ち、社会に働きかける方法を具体的に提案した3年生の姿が見られた。公民科の学習の成果が表れていると思われる。このことから、社会科教育との連動も大切であると思う。更に、全学年による合同授業は、多様な意見の交換があり、思考を深める効果があった。一方で、学年に応じた細やかな支援の工夫も必要であろう。

本研究では、学習内容を家庭に広げ、地域に働きかけることを大切にしたい。今後も地域と共に学んでいくという活動を展開していくことが重要であると考えている。

〈引用文献〉

(1)高知県 「人権教育のための国連10年」 高知県行動計画 平成9年 P20

(2)三重県総合教育センター

「エイズ学習における『共感能力・科学的思考』を育てる教材の開発に関する基礎的研究」 平成10年 P10

(3)木村龍雄

「大学における性・エイズ講義の内容及び方法の改善に関する研究－性・エイズ講義受講者の有無とエイズ知識・態度・行動予測との関連－」 高知大学教育学部研究報告第1部第52号 平成8年 P157

(4)山梨八重子 「エイズの授業づくり(1)－差別や偏見を克服するための教材・授業展開のあり方－」 お茶の水女子大学附属中学校研究紀要第24集 1994 P70

(5)奥田真丈 河野重男／監修 「現代学校教育大事典」 ぎょうせい 1993

〈参考文献〉

- ・高知県教育委員会 「人権に関する児童生徒意識調査[概要版]」 平成15年
- ・森実 「人権総合学習の方法論、人権総合学習の実践的展開－視座と方法・手法を中心に」 解放教育No.415 2002
- ・五島真理為 尾藤りつ子 編著 「A I D Sをどう教えるか 第2版」 解放出版社 2002
- ・池田恵里子 「エイズと生きる時代」 岩波新書 1997
- ・宗像恒次／監修 「ポジティブなわたしからあなたへ」 東京法規出版 平成16年
- ・田野町エイズ教育（性教育）推進委員会 「平成16年度田野町エイズ教育（性教育）推進地域事業研究収録」 平成16年
- ・中川喜代子 「人権学習ブックレット② 偏見と差別のメカニズム」 明石書店 1998
- ・武田淳 「打ち明けてくれてありがとう 第二部 波紋」 エイズ教育研究会 2001
- ・赤瀬範保 「あたりまえに生きたい－あるエイズ感染者の半生－」 本馬書簡 1991
- ・ロバート・サンチェス 「父親になったジョナサン」 大月書店 2005
- ・北國新聞 「19歳の旅立ち 薬害エイズ 孝祥君の軌跡」 1997
- ・尾鋪恭一・鮎川葉子 「知っていますか？A I D Sと人権 一問一答 第3版」 解放出版社 2005
- ・UNAIDS／WHO 「H I V／A I D S最新情報 2005年末現在」 2005
- ・吉原なみ子 霜山龍志 「専門医が語るエイズの知識」 オーム社 2000
- ・北山翔子 「神様がくれたH I V」 紀伊国屋書店 2000